

『釈摩訶衍論』の遼代における流通

—房山石経の記述と周辺事情—

関 悠 倫

一、はじめに

筆者はこれまで、『釈論』の成立時期を、幾つかの資料を呈示すること、七世紀後半から八世紀前半であると指摘した。成立地についても中国で製作された可能性があることを指摘した¹。加えて『釈論』には華嚴思想ばかりではなく、初期密教の教理も合わせ持っていることを論じてきた²。

本研究では以上の成果を踏まえながら、遼代に石経事業を指揮した道宗皇帝、当事業の中心的な人物である通理大師、それ以後の『釈論』を取り扱う論師達の動向から、遼代における『釈論』の流通を審らかにしたい。つまり『釈論』が中国において大いに受容されたこと、そして密教との接点を有する典籍である点を論じることで、あらためて『釈論』が中国において製作されたとする説を補強したいと考えている。

二、遼代の流通に関する先行研究の見解と方法論

ここでは遼代の『釈論』の流通について指摘している先行研究の見解を中心に取り上げていくことにしたい。

まず中国圏内で撰述された『釈論』の末釈を検討し、遼代の石経事業について考察した塚本善隆の論考がある。塚本説では「通理大師の刻経目録に於いて、特に注意を要するものは、第五百六十八帙「寧」に属した『釈摩訶衍論』が刻せられていることである。何となれば、それは仏教学界の重大事件たる契丹大蔵経の内容について、頗る重要な暗示を与えるものであるからである」と指摘しているが、この説は『釈論』がどのような地域で成立したのかまでは言及がない。

次に遼代の密教について言及している鎌田茂雄の論考がある。鎌田説は『釈論』が遼代の密教受容の中に大きな役割を担っていると指摘している⁴。つまり鎌田説は、華嚴と密教を融合させるなかで『釈論』の思想が一役買っており、当時造論された『釈論』の末釈を密教関係の典籍であると理解しているところに独自性が認められる。

このように塚本、鎌田、両氏の指摘は、遼代の石経事業や当代の仏教に『釈論』が重要な位置を占めていたとする興味深い指摘をしてお

り参考になる点が多い。しかし『釈論』の成立地等についてはほとんど言及されておらず、遼代における『釈論』の流通については手つかずのため検討の余地がある。

本研究では、従来の方法に鑑みられていない視点―『釈論』が流布した足跡を洗い出すという点―を念頭に入れながら、遼代の流通を概観することで『釈論』の受容された形跡を明らかにしていきたい。

三、房山石経について

―石経の記録に見える『釈摩訶衍論』の実像―

三―一 房山雲居寺について ―開創から通理大師まで史的概観―

雲居寺⁵を開創した人物は、隋代の僧静琬といい、その創建の目的は、法滅により正法が廢れることを恐れそれに備えるためとされる⁶。

本節の目的である『釈論』との接点は、遼の八代皇帝である、道宗（生没一〇三三―一一〇一・在位一〇五五―一一〇一）の時代に明確になる。詳しくは後述するとして、ここでは「大遼涿州鹿山雲居寺統秘藏石経塔記」（以下「石経塔記」）を確認したい（関連箇所は傍線を付す）。

大遼留公法師奏、聞聖宗皇帝、賜普度壇利錢、統而又造、次興宗皇帝、賜錢又造、相國場公遵勛、梁公頴奏、聞道宗皇帝、賜錢造經、四十七帙、通前上石共計一百八十七帙、已厝東峰七石室内

見、今大藏仍未及半有、故上人通理大師、緇林秀出、名実俱高、教風一扇、草偃八宏、其余德業、具載宝峰本寺遺行碑中、師因游茲山寓宿其寺、慨石経未円有、統造之念、興無念慈、為不請友、

至大安九季正月一日、遂於茲寺、開放戒壇、仕庶道俗、入山受戒、叵以教知、海会之衆、孰敢評之、師之化縁、寔亦次之、方尽暮春、始得終罷、所獲施錢、乃万余緡、付門人見右街僧録通慧円照大師善定、校勘刻石、石類印板、背面俱用、鐫経両紙、至大安十年、錢已費尽、功且權止、碑四千八十序、経四十四帙、題名目錄、具列如左、未知後代、更更繼之、又有門人講経、沙門善銳念⁷

これは天慶八年（一一一八）に雲居寺南塔の下に建立された仏堂に關しての事績が記録されたもので、選者は題沙門志才という人物である（雲居寺もしくは付近の僧で、文筆に秀でた人物とされる⁸）。

そこには、聖宗（生没九七二―一〇三二・在位九八二―一〇三二）が資金援助し、その事業を興宗（生没一〇一六―一〇五五・在位一〇三二―一〇五五）が引き継いでいく。そして道宗に出資を促したのは「国場公遵勛」と「梁公頴奏」とされる。

王族の事業であつても経蔵の半分ほどしか刻経されず、それを知つた通理大師が一念發起して、大安八年（一〇九二）に広く淨財を募るため、雲居寺を道俗関わらず開放し、受戒法会を執行した。大安九年（一〇九三）正月一日から春まで約三箇月にわたり行い、法要で得た

淨財を事業に充当したとする。

通理大師は、刻経の際に『契丹大藏経』を底本として参照したとされているが、当文献はこれまで現存（最近、韓国で一部が発見されたとする）¹⁰ していないとされてきた。小野玄妙は試案として周辺資料に基づき再構築したものが『仏書解説大辞典』シリーズの別巻に収載されている。¹¹

そして先に引用した「石経塔記」には、『契丹大藏経』を底本としている形跡が確認できる記述がある。以下のように説いている。

校勘の石経、石は印版に類し、背と面俱に用いて、経両紙を鑄る。

道宗の治世においては、房山石経に刻経する際、経藏を底本としていたことが分かる。この記事の信憑性を裏付ける指摘に、竺沙雅章が以下のように論じているので確認したい。

とくに道宗時には三十余行・行数十字に及ぶ大碑がつくられたが、つづく通利（理）大師が刻した石経は横長の小碑であった。

林元白「房山遼刻石経概観（下）」（『現代仏学』一九六一―三三）

に掲げる挿図をみると、『大方等陀羅尼経』巻一は一行十七字、印刷本ならば紙縫にあたる部分、石経では首行に「大方等陀羅尼

一十覆」の文字が見える。経題につづく「一」は巻数、「十」は張数、「覆」は千文字帙号であって、印刷本の形をそのまま刻したのであろう（拓片三）。また天祚帝保大元年（一一二二）刻『清浄観世音菩薩普賢陀羅尼経』もまた一行十七字であり、経の尾題下に「羊」の帙号が刻されている（拓片四）。以上、『校正別録』の記録と房山石経の形状からみれば、契丹蔵が毎行十七字詰であったことが明らかである。¹²

さらに竺沙は、「契丹蔵の刊行を始めた興宗時代の重熙十一年（一〇四二）から二十四年間に刻した『大宝積経』に、すでに『随函録』と同じ帙号が付されている。すなわち、石経に帙号を附けることが契丹蔵の刊行とほぼ同じ時期に始まっていることが分かり、印経と石経との関係づけた妻木説の正しさが立証される」と結論づけている。¹³

『契丹大藏経』の様相を確認できるものとして、五代石普の河洪撰『新集藏经音義随函録』（以下『随函録』）がある。この事実を指摘したのが妻木直良である。さらに妻木の論考を確認すると、妻木は『契丹大藏経』はすべて五百七十九帙があり、編号については、麗本と宗本と『開元积经録略出』の千文字帙号とは合わず、『随函録』のみが一致していることを明らかにした。¹⁴

先行研究の説を総合すると、『契丹大藏経』の雕造開始を重熙十一年（一〇四二）とし、咸雍四年（一一〇六八）には五七九帙が雕印され¹⁵

たとされる。その後も敕旨によって加増分が雕造され、遼の末まで継続したとされる。その雕造している最中、道宗の治世である清寧九年（一〇六三）、すなわち高麗文宗一七年に、高麗へ『契丹大藏經』が輸出されたとする。したがって『契丹大藏經』の事業が完遂したのは咸雍八年（一〇七二）、高麗では文宗二六年の時代とする。¹⁶

これらの情報は以降の考察でも、『釈論』が国家間で輸出入された経緯を勘案する上で押さえるべき点である。次項では通理大師と『釈論』の関係を中心に見ていこう。

三―二 通理大師と『釈摩訶衍論』

―「石経塔記」と「□□上人墳塔記」の記述―

先に通理大師の刻経事業について「石経塔記」の記事を中心に確認していく。理解考究のため当該箇所を以下に抜き出すと（傍注並びに表記は筆者が付したもの）、『釈摩訶衍論』という名は以下の順番に示されている。

- 大丈夫論二卷・入大乘論二卷・大乘掌珍論二卷・大乘五蘊論一卷・大乘広五蘊論一卷・大乘起信論一卷・宝行王正論一卷 命（一帙）

- 摩訶衍論十卷 寧（一帙）

- 大乘本生心地観経八卷 壁（一帙）

- 大乘理趣六波羅蜜経十卷 杜（一帙）

次に、①千文字である帙名の「命」・「寧」・「壁」・「杜」という順は何を意味しているのか、②『起信論』が一卷と表記されているのはなぜか、③『釈論』がどのような経緯で刻経されるようになったのか、という以上の三点について順に考察してみたい。なお、ここでは『随函録』を比較資料として用いる。¹⁷

①は、まず『随函録』の帙に対する典籍の所属を確認すると、「大乘経」・「大乘論」・「小乗経」・「小乗律」・「小乗論」・「賢聖集」・「追加分」というグループによって構成されていると分かる。「石経塔記」と比較してみると、『釈論』の「寧」、「大乘本生心地観経」の「壁」、「大乘理趣六波羅蜜経」の「杜」の三種は「追加分」に所属していることになる。¹⁸

次に②は、『随函録』と「石経塔記」の「命」の内容を比較すると大よそ合致している。¹⁹しかし『随函録』には続きの文字として「臨」と「深」と「履」等の帙が続く。ここに挙げた前の二帙は大乘論書、後の一帙は小乗教を入蔵している。参考までに筆者が整理した内容を記載することにした。²⁰

臨 大乘起信論等十一卷同帙

大乘起信論二卷、三無性品二卷、発菩提心経論二卷、無相論

二卷、観所縁論釈一卷、方便心論一卷、如実論一卷
 廻諍論等十六論十六卷一帙

廻諍論一卷、大乘法界無差別論一卷、提婆菩薩破楞伽經中外
 道小乘四宗論一卷、提婆菩薩楞伽經中外者小乘涅槃論卷、
 縁生論一卷、百字論一卷、十二因縁論一卷、老輪盧迦論一
 卷、大乘百法明門論本事分中略録名数一卷、観総相論頌一
 卷、止観門論頌一卷、手杖論一卷、設論一卷、六門教授習定
 論一卷、解捲論一卷、掌中論一卷

小乗經二百四十部六百十八卷四十八帙
 小乗經音義第四之一

履 長阿含經一部二十一卷、第一帙十一卷、第二卷、第二卷、第
 三卷、第四卷、

以上を見る限り、『随函録』に基づけば「命」から「寧」の間に
 は、「小乗経」・「小乗律」・「小乗論」・「賢聖集」までの計四部二二二
 帙という量を割愛していることになる。すなわち「石経塔記」では、
 意図的に新訳である実又難陀訳『大乘起信論』を除いて、真諦訳『大
 乗起信論』のみ刻経し、直ぐに「寧」の帙に収蔵されている『釈論』
 に手を伸ばしていることになる。この処理には何かしらの意図が働い
 ているように見える。これは『釈論』が真諦訳『大乘起信論』の注釈
 書である関係を考えているように思える。

そこで『釈論』と通理大師が如何にかかわっているか見ていき
 い。これに関連する記述が、遼代の公文書簡を記録した『遼文存』の
 「□□上人墳塔記」(以下「上人墳塔記」)に見出せる(括弧は傍注、
 傍線は筆者が付したもの)。

□□上人墳塔記(●天慶十年)
 師諱崇昱、俗姓李氏、安次縣崇福里人也、歳近韶亂有異常童□進
 止施為皆出家、相始季廿一禮當縣□□義隆法師、為師勤奉左右
 □□□□□□□□遇恩具□大尸羅尔後□親妙理僧□□□□□□
 □登涉海岳授□說金輪、於燕台永泰寺疏全臻師年二十四於本寺、
 啓唯識瑜伽論窮、於□□□□始未次歲迴相棉性、充楊令公大王講
 主閣開華嚴□經、月滿三遍⑤談七十席、●摩訶衍論・菩薩戒・金
 剛般若等經、聯綿不絶、歷方度化、踵普賢之先、蹤遍境湧籠躡聖人
 之後、跡萬類含靈一心垂濟師之願也、大安初豁然大悟曰、市朝名
 利水月空花究、之非真在人成累遂罄捨衣盃賑貧施乏無、復遺餘還
 訪孤征首抵、王家島先有通理策大師住止、於此□授以達摩伝心之
 要、一見情通事重告、●至八年結心相與返詣西峯駐錫、於石経山
 雲居寺與師同辦石経、復更教禪□、又遷住佛岩山丈室寂居門絶賓
 友暨、天慶四年秋八月因還本刹拜先師塔、至十二月十一日夜、誨
 門人曰、日中有昃月滿有虧物盛有衰人生有藏□□□省□易吾言時
 在寅初□常睡眠⑥、然而逝教齡七十、有六僧夏六十至十三日、茶

毗於寺西北隅、是時日慘天昏道俗号慟、焚無異氣舌不変灰、至九年二月建石塔、於先師塋穴之乾位祥言等念師解行之絶倫性相之該博誘物之奮縁講傳之独歩恐陵移海變□□嘉声謹募殊工刻石成記
(拓本 碑在東安)²¹

この記事は「通理大師」ではなく「通理策大師」とある。塚本善隆は「通理策師が所謂「通理大師」であることは疑いない。通理大師は石経山に来る前は、王家島(宛平? 中国今地名大辞典参照)に住した禅の達人であったことが知られる²²と指摘しているが、説明が簡略であるので補足を試みたいと思う。

そこで①③の番号を付した順に考えてみることにしたい。

まず①の天慶十年は、西暦一一二〇年であるから、道宗の次代、天祚帝(一一〇一―一一二五)の治世を示している。②は、重熙二四年(一一〇五五)から翌年の清寧二年(一一〇五六)の間、通理策大師が『摩訶衍論』、『菩薩戒』、『金剛般若』等の典籍を講讚したとする記録が確認できる。前の行に目を転じれば、『瑜伽』、『唯識』、『華嚴経』も研究し王侯貴族のために講義をしていたとする。

最後に③は、通理策大師が大安八年(一一〇九二)に房山雲居寺に入寺したことを記している。「石経塔記」には大安九年に寺を開放し受戒会を執行しているの、时期的にも違和感はないであろう。彼は七十六歳で入寂していることからすると、彼が入寺したのは、五十四歳

前後ということになる。

以上のことから、「石経塔記」の記録と合致しており、「上人墳塔記」は通理大師の事績を述べていることは明らかである。何よりも通理大師が道宗治世以前より『釈論』の存在を周知していたことを知り得る重要な記述といえよう。『釈論』が当時かなり知名度のある典籍であったことを傍証している。

以上を踏まえて、まず②に対する見解を述べると、『釈論』が真諦訳の『起信論』の注釈書であることから、旧訳を採用し新訳である実又難陀訳を割愛したことになるだろう。そして③については、通理大師が皇帝の命により『釈論』を研究し講義していたことが背景にあつたと想定できる。

では次にここで得られた見解を踏まえて、道宗と『釈論』の関係を紐解き、中国国内に『釈論』の足跡が確実にあったことを論証していきたい。

四、道宗と『釈摩訶衍論』の関係

四一 『遼史』と『陽台山清水院創造藏経記』の記述

道宗(生没一〇三二―一一〇一・在位一〇五五―一一〇二)は遼代の第八代皇帝であり、咸雍二年(一一〇六六)に国号の「大契丹」から「大遼」と改名した人物でもある(契丹から遼への改名は二度目)。その生い立ちは『遼史』巻二二に見える(関連する箇所は傍線を付す)。

道宗孝文皇帝、諱洪基字涅鄰小字查刺興宗皇帝長子。母曰仁懿皇后蕭氏。六歲封梁王。

重熙十一年、進封燕国総領中丞司事。明年、総北南院樞密使事。

(中略) 二十四年八月己丑興宗崩、即皇帝位於柩前哀慟不聽政。²³

道宗は七代興宗の嫡子として誕生し、母は仁懿皇后という。重熙二十四年(一〇五五)に興宗が崩御するに伴い即位し、興宗の手掛けた『契丹大藏経』事業を継承している。その詳しい記事が「陽台山清水院創造藏経記」(以下「造藏経記」)に確認できる(関連する箇所を傍線を付す)²⁴。

陽台山清水院創造藏経記

燕京天王寺文英大德賜紫沙門志延撰

郷貢進士李克忠書

陽台山者、薊壤之名峰、清水院者、幽都之勝槩、山之名伝諸前古、院之興止於近代、將構勝縁、施逢信士、今優婆塞南陽鄧公從貴、善根生得、淨行日嚴、咸雍四年三月捨錢三十万、葺諸僧舍、又五十万募同志、印大藏経凡五百七十九帙、創内外藏而龕措之、藏事既周、求為記、聊叙勝因、俾信來裔

咸雍四年歲次戊申三月癸酉朔四日丙子記

燕京右街檢校太保大卿沙門覺苑

通天門外共御石匠曹辯鑄²⁵

選者は沙門志延といい、文末には覺苑の名が確認でき、この二人は大藏経雕造事業に直接かかわった人物であると判断できる。²⁶特に覺苑は『大日経』の末釈を撰述した人物でもある。

当の『契丹大藏経』については、咸雍四年(一〇六八)三月現在で「五百七十九帙」が雕造されたと記録されている。『契丹大藏経』の数が五七九帙あるということは、一〇六八年時点で、『釈論』が入藏されたことを傍証していることになるだろう。

では次に遼代における『釈論』の受容された形跡を確認していくことにしたい。

四―二 遼代の『釈摩訶衍論』の受容 ―末釈と関連典籍の成立年代―

道宗に関連する『釈論』の末釈、ならびに『大日経義釈演密鈔』、『顕密円通成仏心要集』の記事を確認していこう。まず『釈論』の末釈には六種類あまりがある。その中で道宗と関連するものは三種(三・四・六)である。ここでは理解考究のため六種すべて列記することにしたい。

(一) 『釈摩訶衍論記』

唐聖法撰²⁷

(二) 『釈摩訶衍論疏』三卷

唐法敏撰²⁸

(三) 『釈摩訶衍論贊玄疏』 五卷 宋法悟(通法大師)撰²⁹

『贊玄科』 三卷

『大科』 一卷

(四) 『釈摩訶衍論通玄鈔』 四卷 遼志福(慈行大師)撰³⁰

『通玄科』 三卷

『大科』 一卷

(五) 『釈摩訶衍論記』 六卷 宋普觀(無際大師)撰³¹

『釈摩訶衍論科』 卷下³²

(六) 『釈摩訶衍論通贊疏』 十卷 宋守臻撰³³

『通贊科』 三卷

『大科』 一卷

ここでは道宗と関係する(三)・(四)・(六)の記事を見ていこう(関連する箇所には傍線を付す)。この三種の注釈書は、すでに道宗時代に撰述されたものであることが指摘されている。³⁴(三)の法悟『釈摩訶衍論贊玄疏』には以下の記事が確認できる。

摩訶衍論是則本論通前給有三譯、然斯釈論、肇從秦代、迄至皇朝
僅七百年間、未曾流布邁一千運内、方遂伝通、我聖文神武全功大
略聰仁睿孝天佑皇帝、位纂四輪、道逾三古、(中略)至於禪戒兩
行・性相二宗、恒切熏修、無輟披翫、三宝荷住持之力、万邦飲清

浄之風、功德無辺、称揚不尽、粵若清寧紀號之八載、(中略)皇
上萬樞多暇、五教皆弘、乃下温綸、普搜墜典、獲斯宝冊、編入華
龕、自茲以來、流通浸廣、此論也、総十軸之妙釈、窮五分之微
詮、百億契経説示、尽皆符会、一代時教包羅、無所闕遺、³⁵

まず引用文の検討に入る前に同疏の序文には道宗時代の家臣の名が
確認できる。それには「佰伍拾戸臣耶律孝傑奉勅撰 臣聞覺皇之立教
也云々」³⁶とあり、「耶律孝傑」という人物が君主(皇帝)の徳を讚歎
している内容とわかる。この人物は『遼史』卷二四の道宗の事績に確
認できる。「五年春正月壬申、如混同江、癸酉賜宰相耶律孝傑名仁
傑・・・」³⁷とあり、『統資治通鑑』卷七四には「元豊二年(遼太平五
年)春正月壬申。遼主如混同江、耶律伊遜、(旧作乙辛今改)、薦耶律
孝傑云々」³⁸と記録されている。

前者は太康五年(一〇七九)、後者は元豊二年(一〇七九)という
同時代を指す。ともに道宗在位の年代であり、天佑皇帝は道宗を指
し、同国の宰相を務める耶律孝傑が序において君主の偉業を述べたも
のであることは明らかである。³⁹

それでは『釈論』がどのように道宗に見出されたのかを引用文を見
ていく。それには『釈論』が秦代までさかのぼる約七百年間の長きに
わたる期間、だれの目にとまることなく、道宗皇帝の時に発見された
とする。後半の説に目を向けると、清寧八年(一〇六二)に道宗が普

く散逸している典籍を搜索した時、得られたとする。さらに、「獲斯宝冊、編入華龕」とあるように『釈論』を『契丹大藏経』に入蔵したことが理解できる。

これらの記事が示唆するのは、道宗自身が『釈論』をインド成立の典籍として見ており、大乘の精髓を究めていると理解していることにある。この他にも道宗が自ら『釈論』を研究していたと見做し得る記述がある。

賜号曰、贊玄疏皇上聽政之餘省方之際、歴刊詳而在手咸印證、以經心于此論中先立御解。⁴⁰

法悟は道宗が『釈論』研究をしていることを、「御解」という語によって表現している。これに前述した、「□□上人墳塔記」にある道宗が『釈論』を重要視し講義を要請している点を加味すれば、道宗が国家をあげて、『釈論』研究を盛んにさせたと評価しても大過ないであろう。以上のことから『釈摩訶衍論贊玄疏』の成立は、一〇七九年前後に成立したということなるだろう。

(四)の志福の『釈摩訶衍論通玄鈔』には道宗自身の序文があり、『釈論』の作者と『起信論』作者である馬鳴について以下のように説いている。

朕聞、如来啓運具四智、以流微聖教、談微応三乘、而導物自結集、以後逮伝布以還不有聖賢疇能啓迪、故馬鳴大士即其人也、(中略)著一百部論釈、百億契経或華文以立名、(中略)次有菩薩号曰龍樹、思報師恩、広宣論意造釈論十卷、⁴¹

道宗が世に流布する聖教を結集した馬鳴の徳を讃えている。続きを見ると作者である志福が『起信論』の作者である馬鳴によって膨大な数の論釈を著したという『釈論』の説を踏まえて、その恩に報いるために著されたのが一〇巻本の『釈論』だと紹介している。

次に彼の肩書を見ると、「大遼医巫閭山崇祿大夫守司徒通圓慈行大師賜紫沙門志福撰」⁴²とあり、大遼の名を確認できる。『遼史』卷二二には咸雍五年(一〇六九)に「僧志福加守司徒」⁴³とあり同鈔の記事と一致している。したがって『釈摩訶衍論通玄鈔』は一〇六九年以降の成立になるだろう。

(六)の守臻の『釈摩訶衍論通贊疏』は、これまで義天の『新編諸宗教藏総録』にのみ名前が確認できるとされ、実物は確認できない状態であった(日本には請求されていない)。しかし竺沙雅章が『契丹大藏経』の雕造年代を考察した際、新出の資料として『釈摩訶衍論通贊疏』と『釈摩訶衍論通贊疏科』を紹介している。今、竺沙の解説と当文献の巻下と刊記を転載する(写真は『文物』からのものを使用)。

要するに聖宗時雕印の確かな証拠はまだ見出せない。むしろ新発見の経卷のなかで、雕印についてもっとも確実な史料は、『釈摩訶衍論通贊疏』巻第十と『同科』巻下との刊記である。

咸雍七年十月 日燕京弘法寺奉

宣校勘雕印流通

殿主講經覺慧大德臣沙門行安勾当

都勾当講經詮法大德沙門矩校勘

右街天王寺講經論文英大德賜紫臣沙門志延校勘

印經院判官朝散郎守太子中舍驍騎尉緋魚袋臣諱資陸提點

(『館刊』五封面、『文物』一九八二—六四五)

この刊記はさまざまな事実を物語る重要な資料である。先ず『釈摩訶衍論通贊疏』は道宗朝の学僧守臻の撰述で十巻、加えて『通贊科』三巻『大科』一巻あったことが高麗義天『新編諸宗教藏総録』にみえるが、ともに佚して伝わらなかったものである。今回発見されたのはその巻十と『科』巻下であり、前者は毎紙二十八行行十二から二十三字、第十四紙背に「宣賜燕京」朱印が捺され、ともに大宗から興宗の諱字が欠筆されているという。⁴⁴

竺沙説では『釈摩訶衍論通贊疏』と『釈摩訶衍論通贊疏科』の刊記には咸雍七年(一〇七二)十月に志延という僧が校勘したとする記述、そして後者には太宗と興宗の諱字の欠筆があることに注目してい



る。

志延という人物は、先に述べた「造蔵経記」に登場する人物であり、覚苑とも同年代の僧ということなる。当の『釈摩訶衍論通贊疏』を著した守臻は咸雍七年(一〇七二)十月以前に撰述していることが確認できる。法悟、志福、守臻はかなり近い時期に『釈論』の末釈を撰述していることになり、且つ道宗の同論に対する特有の理解があったことは明らかとなった。

次に関連する典籍を見ていくことにしたい。それは覚苑の『大日経義釈演密鈔』である。この典籍はそもそも一行(六八三〜七二七)禅師の『大日経義釈』⁴⁵の注釈書という性格を有する密教典籍である。こ

の成立は序文において確認でき、太康三年（一〇七七）⁴⁶に完成したと記録されている。

今、その一連の経緯が確認できる箇所を見ていきたい。

勅成十四卷、目之曰義釈、未及宣演玄宗幸蜀、禪師没化、斯文尋墜、洎我大遼興宗御宇、志弘藏教、欲及邇遐、勅盡雕鏤、須人詳勘、覺苑持承論旨、忝預校場、因採群詮、訪獲斯本、今上繼統、清寧五年、勅鏤板流行、上來六段不同、総是第一文、前聊揀已竟。⁴⁷

興宗が『契丹大藏経』を雕造する意思を固め、広く典籍蒐集を行った際、一行禪師の『大日経義釈』一四巻を見出し、大藏経に入蔵することを決めた。その際、覺苑は当典籍の注釈書を著す必要性を感じたというものである。『大日経義釈』が雕造された時期は道宗の治世、清寧五年（一〇五九）であったとする。遼代という時代は、密教典籍理解に対して蒐集活動や注釈事業が盛んであったことを示唆している。

一方で、『釈論』との関連を考えると、覺苑は『大日経義釈』を注解する際、『釈論』の思想を取り入れていた。それは「別初総者釈論解云謂一切」⁴⁸という記事から読み取れる。何故、密教典籍の理解に『釈論』の説を採用するのであろうか。

上記の「釈論解云」については後述するが、そもそも引用している内容自体に特徴がある。それは『釈論』が『起信論』所説「摩訶行者総説有二種」云云を「摩訶行とは総」と読み「総」の語に大乘の義を総括しているとする理解を主張したものである。このような読みは『釈論』以外の『起信論』注釈書には認められない。

さらに、上記の「別初総者釈論解云謂一切」の記事そのものが、志福の『釈摩訶衍論通玄鈔』とほぼ全同であることも注目すべき点であり、覺苑が志福（『釈摩訶衍論通玄鈔』の著作を参照しているという証拠になるだろう）

では「釈論解云」とは何かが問題となる。これは文字通り、「『釈論』について何かしらの理解を持っている」という意味だと捉えられる。筆者は、道宗と『釈論』に深い関係があったことによる説だと推考する。以下にその点を論証していくことにしたい。覺苑の『釈論』理解に関連性を指摘できる記事が、覺苑による道宗の徳を讃える説に見出せるので確認したい。

我天佑皇帝睿文冠古、英武超今、十善治民、五常訓物、博綜儒經、有詩賦碑記之製、（中略）尤精釈典、有讚序疏章之作 云云⁵⁰

覺苑は、道宗が博識であり多くの典籍を研究し、その注釈関連の著作、すなわち賛や序、疏を製作したとする業績を紹介している。『釈

論』の末積が製作された背景、そして法悟が『釈摩訶衍論贊玄疏』において「御解」と説いたことを振り返ると、道宗の意向を受けたことにより撰述されていたのは明らかである。

そして道宗が通利大師に対し、『釈論』を含む幾つかの典籍の講義を所望している記事も見逃せない。これに前述した「造蔵経記」に覚苑が『契丹大蔵経』事業に参画していた事、そして道宗が『釈論』を特別視していた事を総合的に評価すれば、覚苑が『大日経』という密教の典籍理解に、『釈論』の説示を用いているのは、道宗の影響があつたと見做しても無理ではないと考える。

そのように見ると、当初述べたように道宗が『釈論』に対する理解を何らかの書物に書き留めていたとしても、何ら不思議ではないといえよう。

最後に道殿の『顕密円通成仏心要集』を見ていこう。『顕密円通成仏心要集』の成立については、覚苑の『大日経義釈演密鈔』を取り上げる箇所が確認できるので、覚苑の著作以降の成立であると考えられる。それは以下のような記述に基づく。

密教心要者。謂神変疏鈔。曼荼羅疏鈔。皆判陀羅尼教。是密円也。⁵¹

道殿は、密教の心要とは何かを述べる際、その教証として「謂神変

疏鈔」という文献をあげている。この「神変疏鈔」の名は、『大日経』の具名である『大毘盧遮那成仏神変加持経』の「神変」を意識したものであり、「疏」は『大日経義釈』を示唆したものと考えられる。すなわち「神変疏鈔」とは、『大日経』注釈書の末積の名前、『大日経義釈演密鈔』を意図した典籍であるのは明らかであろう。

その証拠に、「神変疏鈔」の説として引用される箇所を『大日経義釈演密鈔』の説と比較すると合致する。⁵²このことから本書の成立は覚苑の『大日経義釈演密鈔』が出来た太康三年（一〇七七）以降であることはおよそ判明する。

では道殿は一体何者なのか。多田孝正の指摘を紹介することで理解の一助としたい。多田説では、道殿が覚苑や『釈論』の末積家と同等の待遇を王室から受けたとは考えがたいとしながらも、歴代皇帝の行在所の寺院に常在し、且つ漢人であつたことからある程度の知名度のある僧であると結論づけている。⁵³

次に、本書における『釈論』の影響を幾つか呈示したい。『顕密円通成仏心要集』では准提陀羅尼を密教と規定する説に、⁵⁴『釈論』の特有の思想である不二摩訶衍法を教証としている。さらに『釈論』の不二摩訶衍法についても以下のような説を示していく。

又問曰夫真言者但是能詮言教即以声名句文為体。何得判為円因果海。答云若作此問。

蓋是未知密教宗旨。(中略) 況密宗神呪。當頭円中一眞法界耶。又釈摩訶衍論。(中略) 又甚深玄理論。不動本源論。此二論中広略解説不二果海。当彼二論中能詮之言以何為体。以理推徴。即知以不二果海為体。彼能詮言当尔。即是不二果海。況今六字大明准提神呪。⁵⁵

『釈論』の不二摩訶衍法を陀羅尼であると理解しているのである。そして同法を説くとされる『釈論』所説の『不動本源論』と『甚深玄理論』の二論を能詮の立場とし、⁵⁶六字大明(准提陀羅尼) 不二摩訶衍法を所詮の立場として理解している。これは眞言密教で主張する不二摩訶衍法を密教とする立場と同じ、かつ自性法身とし真理の立場とする理解と近接している。⁵⁷もう一点見ていくことにしたい。

三者密宗神呪即體便是円円果海。故佛不得。如釈大乘論説。円円海仏亦不得。今六字大明准提神呪即體便是円円果海也。⁵⁸

これは『釈論』の修行階梯として知られる「三十三法門」が背景にある。不二摩訶衍法を「性徳円満海」で果位、三十二法門を「修行種因海」で因位とする理解を踏襲して、前者の立場を密教であり、六字大明准提陀羅尼と当てはめている。したがって顕教の立場は三十二法門であると見做していることになる。このように道殿が、『釈論』を

顕密優位論を展開する典籍と理解しているのは明らかである。

遼代における『釈論』の末釈、そして密教の典籍には『釈論』の思想が強く影響をあたえていることを確認できた。繰り返しになるが道宗という為政者の庇護を受けて受容されたことは、中国圏内で同論が流行していたことを傍証しているとも大過ないであろう。

以上、取り上げた典籍以外にも、唐代において早い時期に『釈論』が依用された事例は存在する。澄観(七三八〜八三九)の高弟の一人である圭峯宗密(七八〇〜八四二)の『円覚経大疏釈義鈔』や『円覚経略疏鈔』や『華嚴経行願品疏』⁶⁰において引用されている。⁶²これまでの検討で得られた知見と関連事項を年代順に列挙することにした。

○『釈論』に関わる典籍の成立年代

- ・『釈論』の成立年代は七世紀後半から八世紀前半
- ・宗密(七八〇〜八四二)の『円覚経大疏釈義鈔』⁶³や『円覚経略疏鈔』⁶⁴や『華嚴経行願品疏』⁶⁵に引用されている。
- ・聖法の『釈摩訶衍論記』は八世紀前半から九世紀前半の唐代で成立している。
- ・法敏の『釈摩訶衍論疏』は少なくとも九世紀前半に唐代で成立している。
- ・空海(七七四〜八三五)の『弁顕密二教論』⁶⁶(弘仁六(八二二))に『釈論』が引用されている。⁶⁷

・永明延寿（九〇四〜九七五）の『宗鏡録』は九六一年に撰述されている。

・通利大師は一〇五五年以降『釈論』の講義をしている。

・道宗（一〇五五〜一一〇一）には『釈論』に造詣が深く著作がある。

・道宗は一〇六二年に『釈論』を『契丹大藏経』に入蔵している。

・志福の『釈摩訶衍論通玄鈔』は一〇六九年以降に成立している。

・守臻の『釈摩訶衍論通贊疏』は一〇七一年以前に成立している。

・覚苑の『大日経義釈演密鈔』は一〇七七年に成立している。

・道殷の『顕密円通成仏心要集』は一〇七七年以降に成立している。

・法悟の『釈摩訶衍論贊玄疏』は一〇七九年前後に成立している。

○その他の『釈論』を記録する文献や記録

・『契丹大藏経』は一〇四二年〜一〇六八年の間に五七九帙を雕印している。

・『石経塔記』は一〇一八年に完成し、『釈論』の名を確認できる。

・『□□上人墳塔記』は一〇二〇年に完成し、『釈論』の名を確認できるといわれる。

・『造蔵塔記』は一〇六八年に完成し、『契丹大藏経』の記事が確認できるといわれる。

○他国との関係 —大藏経関連—

・高麗に『契丹大藏経』が一〇六三年に輸入される。

・高麗は初雕本（第一次大藏経）を一〇八七年に完成（モンゴル軍の侵略によってすべて焼失している）⁶⁹。

・義天は『新編諸宗教蔵総録』を一〇九〇年に著している。

・義天は「高麗教蔵都監」を一〇九一年に設置している。

・高麗は再雕本（第二次大藏経）を一二五一年に完成⁷⁰。

明らかに『釈論』に関連する典籍の大半が、中国圏内において集中しているのが確認できる。時期としてはおよそ八世紀〜十一世紀にかけて広範囲に及んでおり、長期的に中国国内で『釈論』が受用されていることになる。そして、後代において朝鮮半島へ『契丹大藏経』が輸出され、義天の『新編諸宗教蔵総録』に『釈論』の名が記載されることになる。

以上を踏まえて、朝鮮半島にどのような経緯で『釈論』が輸入されたのかを義天に関する事績と周辺事情から検討を加えることにしたい。

五、義天と『釈摩訶衍論』の関係

— 現行『高麗大藏経』を中心に —

筆者は前述のように『釈論』の序が中国成立である根拠の一つとして天文字使用の形跡と武則天(六二四〜七〇五)(在位六九〇〜七〇五)が執筆した「昇仙太子碑」と実叉難陀訳『八十華嚴經』の序を依用していることを論じた。つまり『釈論』の序に使用されている則天文字や説かれる弥勒信仰、そして本文に説かれる道教思想と密教を融合させた行法の指南、則天文字の派生と考えられる特殊文字を使用しているなどから、『釈論』作者は武則天の政治情勢をよく把握した人物であると指摘した。

房山石經の『釈論』の拓本を見ると、則天文字の「𠂔」ではなく「天」と表記されていることに気づく。⁷¹これは底本となっていた『契丹大藏經』に入蔵された『釈論』が則天文字から新字体に置換後の典籍であった可能性が高いと考えられる。

契丹は唐代以降の王朝であるから、則天文字が使用されていない文献(『釈論』の底本)を参照して、『契丹大藏經』に入蔵していると推定できる。この『契丹大藏經』が一〇六三年に高麗に輸入され、紆余曲折を経て、義天が一〇九一年に中国から帰国した後、「教蔵都監」を設置し、『高麗大藏經』(第二次開版の再雕本)を開版していることを勘案すれば、『契丹大藏經』開版以前に則天文字使用の『釈論』が高麗に輸入された可能性は低いように思われる。

則天文字から新字体に置換後の『釈論』の高麗時代の収載されている文献を調べると、現行(第二次大藏經)の『高麗大藏經』に雕造さ

れている。⁷²これは繰り返しになるが、義天が高麗に帰国し「高麗教蔵都監」を一〇九一年に設置したことによって、長い年月を経て完成した義天版『高麗大藏經』のことをいう。他に別名として「麗本」と称する。日本では『大正新脩大藏經』を製作する際、底本の一つとなっている(後述するが、『釈論』が入蔵される際も底本として取り扱われている)。

義天版『高麗大藏經』に雕造された巻数(こと)の記録(年代)をまとめると以下のようなになる。⁷³

- 卷一 丙午高麗国大蔵都監奉勅雕造
- 卷二 丁未高麗国大蔵都監奉勅雕造
- 卷三 丁未高麗国大蔵都監奉勅雕造
- 卷四 丙午高麗国大蔵都監奉勅雕造
- 卷五 丙午高麗国大蔵都監奉勅雕造
- 卷六 丁未高麗国大蔵都監奉勅雕造
- 卷七 丁未高麗国大蔵都監奉勅雕造
- 卷八 丙午高麗国大蔵都監奉勅雕造
- 卷九 丙午高麗国大蔵都監奉勅雕造
- 卷十 丙午高麗国大蔵都監奉勅雕造

歴史上では「教蔵都監」が設置されたのは、義天が父文宗の創建し

た興王寺であり、その時代は宣宗八年（一〇九一）とされている。ここでは四〇〇〇巻余りの章疏類の開版がなされた。これが先述した現行の『高麗大藏經』の底本（一般には「義天版」と称するもの）である。

この大藏經は高麗・契丹・宋・日本の諸本を校合したものであると知られている。⁷⁴つまり義天が『新編諸宗教藏総録』、通称「義天録」を編纂した一〇九〇年の翌年の事であり、「義天録」が高麗（朝鮮半島）の文献に『釈論』の名が確認できる最初の文献である。

改めて、取り上げた年代にあたる「丙午」や「丁未」と表記される干支に注目すると、「丙午」や「丁未」は西暦に換算すると一一二六年と一一二七年である。つまり義天の入寂（一一〇一）した後に雕造されたことを物語っている。

もし義天が日本請求版のように則天文字採用の『釈論』を早い段階（中国留学以前）で入手していたとすれば、後代であるが同じ大藏經という性格を持つ、複数の版を用いて校合している『大正新脩大藏經』には、「天冊〓而回〓〓」（石山寺本と高野本のこと）といったような注記は存在してもおかしくないが確認できない。

さらに、「義天版」が日本の本（恐らく則天文字が使用された平安時代の写本ではないか）を校合本の一つとして用いているにも関わらず、当用漢字を用いているのは、中国より請求している契丹版等にはそのような文字が確認できないため採用しなかったと推察される。つ

まり義天が早い段階で日本版のような則天文字使用の本を入手している可能性は低いように思える。

一方で、『大正新脩大藏經』製作の際、『釈論』の底本と校合本に用いられた本の種類を調べると、麗本を底本として、高野本・石山寺本・万徳寺本・宮内省本を校合本としている。問題となる則天文字使用の有無の欄には『高麗大藏經』の表記はない。

そのことは、高麗版には当初より則天文字の記述の無い底本を参照したことを示唆しているのではないか。やはり義天が中国から膨大な典籍を蒐集する以前、いまだ高麗（朝鮮半島）には『釈論』の存在が知られていないか、もしくは伝聞のみで実物を手にする環境になかったのではないかと推察できる。

これまでの『釈論』朝鮮半島成立説は、同半島成立の典籍を同論造論の際に依用していたことが根拠とされてきた。⁷⁵『釈論』が元暁の『金剛三昧経論』⁷⁶を依用しているとする指摘である。しかし『釈論』が影響を強く受けている法蔵（六四三〜七二二）の著作（『華嚴経探玄記』）にも元暁の思想が見出せることがすでに報告されている。

他にも、元暁の著作が李通玄（六三五〜七三〇・六四六〜七四〇）や澄観（七三八〜八三九）といった論師にも依用されており、⁷⁷『釈論』作者とされる龍樹も、元暁の著作や思想を撰取することは、たとえ国外であったとしても不可能な環境ではないということになる。

義天の大藏經開版事業に注目すると、彼は中国に正式に入国するだ

けでなく密入国をしてまで典籍を蒐集することに情熱を傾けている。日本にまで典籍蒐集を精力的に展開している。そのように見れば、典籍交渉が国と国の国交を通さず、大きな志を持つ有志らによっても大陸間での典籍交流が行われていたことは十分に想定できる。

もう一点、『釈論』がなゼインド成立文献として取り扱われてきたのかも考える必要がある。そもそも『釈論』が中国や高麗（義天の理解）でインド成立と見做されたのは、同論の記述が主張していることだけで評価されているわけではない。その点が何に基づくのかいささか私見を述べることにはしたい。

それを考えるのに有効な情報を提供していると考えられる、梁の僧祐（四四五―五一八）が編纂した『出三蔵記集』に以下の記述が確認できる。これは今日ほぼ完全な形として残される最古の経録であり、仏経・訳経の起源について詳しく記しており、失訳経律・失訳雑経・抄経・疑経・注経などの目録についても、多くの経録の中でも依るべきものとされている。⁷⁸ それでは関連する記事を見ていくことにしたい。

仏法有六義第一応知一卷（未得本）六通無碍六根浄業義門一卷（未得本）。右二部。齊武帝時。比丘釈法願抄集経義所出。雖弘經義異於偽造。然既立名号則一部。懼後代疑乱。故明注于録。仏所制名教経五卷。右一部。齊武帝時。比丘釈王宗所撰。抄集衆経有

似数林。但題称仏制。懼乱名実。故注于録。⁷⁹

僧祐は三種の典籍について述べている。①『仏法有六義第一応知』、②『六通無碍六根浄業義門』、③『仏所制名教経』の典籍について、①と②の典籍は、斉の武帝の治世、比丘釈法願が諸経のエッセンスを抜き出して典籍としたものである。経典の教えを弘める点では偽作と異なるが、後代の人が疑念をいだくことのないよう確実に注記するとある。

③の典籍については、同じく斉の武帝の治世、比丘釈王宗が編纂したものである。多くの経典を集めて書いているようであるが、これは『数林』と似ている。しかし典籍名に「仏所制」という題名が混乱をきたす恐れがあるので注記しておく、というものである。

僧祐という人物は、後代の人が正しい教えと誤った教えを区別できなくなることを憂慮し明確に偽経排除を推し進めた人物である。そういった典籍を大蔵経に入蔵することを阻止することを目的として書かれた書籍である。⁸⁰

このように、『釈論』の成立以前においても偽撰疑惑のある典籍がある一定の管理下において選定しており、典籍が主張する情報のみを頼りとして理解しているものではないのは明らかである。無論、『釈論』においては古い経録にその名を確認できないため、入蔵、入録の対象から除外された可能性もありうる。

一方で、当時の政治情勢、さらには王室の意向によっても、典籍の取り扱われ方に多少の異なりが生じているようである。

これに関連する指摘が牧田諦亮によって提出されている。牧田説では偽経製作の動機と目的について六項目を挙げている。すなわち、第一に「主権者の意に副わんとしたものの」、第二に「主権者の施政を批判したものの」、第三に「中国伝灯思想との調和や優劣を考慮したものの」、第四に「特定の教義信仰を鼓吹したものの」、第五に「現存した特定の個人の名を標したものの」、第六に「療病・迎福などのための迷信に類するもの」、として分析している。⁸¹

『釈論』の場合、経典ではなく、また遼代で製作された典籍ではないため、偽経製作の動機として必ずしも合致するとはいえない。しかし『釈論』が遼代で流通した要因を検討するには有効な指摘であるので理解の一助としたい。

再度、『釈論』の遼代の流通を考えると、明らかに『釈論』は王室の意向によって石経事業や末釈製作が進められている。遼の歴代の皇帝のなかでも道宗を中心とした王室の受用姿勢がそうである。そうすると『釈論』を重用した当時の統治者である道宗が、いかなる理解に基づいて『釈論』を重用したのか、彼の人物像を考える必要がある。道宗について指摘している鎌田茂雄の論考があるので紹介したい。

遼代密教の起る社会的背景を考えるに、まず遼代の契丹民族の

生活意識を問題としよう。(中略)このようなシャーマニズム世界観をもつ民衆が、密教受容の社会的基盤となったことは否定できないと思う。遼代密教が純正な密教でなく、陀羅尼を重視し、現世利益を目的とした通俗密教であったことも、このような社会的背景から生まれたのであろう。(中略)釈摩訶衍論は道宗の清寧八年(一〇六二)、道宗の命により、広く墜典を搜索した時に得られたものである。(中略)道宗は本論を発見し、自ら研究し、遼代高僧はこれに従った。(中略)唐の法蔵の華嚴は、貴族主義的な絶対肯定主義の哲学思想で、庶民の生活の性格意識とは無関係な思想であったが、遼の支配者が、中国的中央集権国家を樹立するにさいして、範を唐朝にとつたために、唐代仏教を代表する華嚴を採用したことは大きな意味があると思う。しかし遼代密教では華嚴を単に道具として用いたにすぎなかった。華嚴と融合した密教といえば、高度な哲学的仏教を考えるが、遼代密教は決してそのようなものではなかった。⁸²

鎌田は、遼代の仏教が華嚴と密教が融合した、独特な密教文化を形成したものと論じている。そのなかでも特に『釈論』が道宗に重用され、密教の理解にも大きく影響を与えたとする。以上の指摘は合理性があり、今後の同論の思想構造を検討する上で非常に有用なものといえよう。

またこの問題に関連した論考に、木村清孝も遼代仏教にける密教融合について、前述した『顕密円通成仏心要集』を取り上げ、当代が顕密双修の重要性と総合仏教の一典型を示しているとする興味深い指摘をしている。⁸³ 筆者も両氏の見解を支持したい。

まとめ

本研究は遼代にける『釈論』の流通をとおして、『釈論』がどのような経緯を経て取り扱われてきたのか、従来ほとんど検討されていない点から検討を試みた。

『釈論』には則天文字の使用があることから、同論は中国圏内の国家の施策と密接に関連した典籍である。それが、遼代になると道宗の政策を示唆する資料（房山石経の資料や遼代の記録、通理大師の事績）を基に検討した結果、彼の重用する姿勢が影響を与え、末積を製作する機運を高め、密教典籍にも依用される程であったことを確認した。

道宗は『釈論』を真撰として見て、その内容を講義するよう時の論師（通理大師）に要請し、道宗自らも『釈論』の注釈書を著すほど造詣が深いことが明らかとなった。その影響を受けた論師達が末積を製作し、密教典籍理解にも『釈論』理解を取り入れていたのである。その間、『契丹大藏経』として高麗に輸入され、後に義天版『高麗大藏経』にも入蔵されている。

日本では、出自が不明な典籍であり、後代においてどのように取り扱われてきたのか検討されないまま、独特な思想をとく偽書として処理されてきたが実際のところ、そうではないことが指摘できる。

本研究では、客観的に『釈論』が受用された形跡が中国圏内に集中していることを突き止めた。一方、高麗の義天が『新編諸宗教藏録』（義天までの中国の目録には『釈論』は入録されていない）や義天版『高麗大藏経』を編纂する際に、『釈論』を経蔵と大藏都監に取り入れたことが確認でき、『釈論』の流通が遼代を媒介として大きく花開いたことも鮮明になった。

元暁の著作を『釈論』が依用していたとする指摘については、思想的に朝鮮半島の関係は確かに認められる。⁸⁴ この点については、『釈論』作者以前に存在した論師（中国）たちも参照（元暁の著作）している形跡が存在したことから分かるように、『釈論』作者が中国にいたとしても元暁の著作を参照し得たことは明らかである。朝鮮半島成立の典籍を依用しているからといって、同半島成立とする主張は成り立たないと考えられる。

さらに、『釈論』が遼代の仏教思想の中核であった密教の理解に大いに取り入れられ、同時に『釈論』の末積が製作されている点も確認できたことは、遼仏教の思想に、その特性（同論の作者とされる独特な龍樹観や三十三法門といった思想）を色濃く反映させたことによつて成し得た事績と評価できる。これまで検討してきた、『釈論』が中

国内で成立したことを強化する点である。

作者については、朝鮮半島出身あるいは中国出身者のいずれかになるであろうが、本考察において明らかにになったように、典籍の流通が大陸間でなされていることから、現段階では東アジア圏内の人物であり、且つ朝鮮半島と中国の仏教事情を知り得る人物であるとしか言えない。今後の課題としたい。

最後に、本研究において『釈論』の依用・影響を受けた典籍や思想については、関係があると指摘したのみで詳しく考察を加えられなかった。その点についても、今後探求し徐々に明らかにしていきたい。

注

- 1 拙稿「『釈摩訶衍論』の成立事情 ―序の記述と武則天と則天文字―」(『密教学研究』五〇 二〇一八)
- 2 拙稿「『釈摩訶衍論』における「六馬鳴」について」(『東洋学研究』五四 二〇一七)、拙稿「『釈摩訶衍論』における密教的なもの―架空經典を中心に―」(『仏教文化学会紀要』二六 二〇一七)
- 3 塚本善隆「遼代の石経統刻事業」(同著『塚本善隆著作集』五 大東出版 一九七五 五一五―五一二)
- 4 鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』(東京大学出版会 一九六五 六〇四―六一八)
- 5 まず、房山石経における先行研究に塚本善隆の成果がある。これは石経寺院の歴史や設立の内情等を精査した(塚本善隆「遼代の石経統刻事業」『塚本善隆著作集』五 大東出版 一九七五)。次に塚本の成果をもとに若干の修正を加えた、気賀沢保規を編者とし刊行された

- 『中国仏教石経の研究』がある(気賀沢保規「緒論 ―『房山石経』新研究の意味」『中国仏教石経の研究』東京大学学術出版 一九九六)。
- 6 塚本善隆編『望月仏教大辞典』(世界聖典刊行協会 一九八八 二九〇―二九二)を参照した。
- 7 「大遼涿州鹿山雲居寺統秘藏石経塔記」(『金石萃編』国風出版社 中華民國五三年 一九六四 二九四四―二九四五)
- 8 塚本善隆「遼代の石経統刻事業」(同著『塚本善隆著作集』五 大東出版 一九七五 五〇三)
- 9 「契丹大藏経」がいつ頃から雕造されたかについては、竺沙雅章「開宝蔵」と「契丹蔵」(『古典研究会編』『国書漢籍論集』汲古書院 一九九二)に興味深い指摘がある。それは本研究とみじくも共通した分野である『釈論』の未釈に関する記述から見出されるとする。
- 10 藤本幸夫「高麗大藏経と契丹大藏経について」(気賀沢保規編『中国仏教石経の研究』京都大学学術出版 一九九六 二五六―二六五)藤本は現在九十一種一四七巻について若干の誤植を修正し列挙している。
- 11 小野玄妙「契丹大藏経(私案)」(小野玄妙編『仏書解説大辞典』別巻仏典総論 一九九一 六九一―七〇三)
- 12 竺沙雅章「契丹大藏経小考」(内田吟風博士頌寿記念会編『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』同朋舎 一九七八 三一四―三一五)
- 13 竺沙雅章「契丹大藏経小考」(内田吟風博士頌寿記念会編『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』同朋舎 一九七八 三一八)尚、竺沙は以降の説において、妻木説の妥当性を再検証し、「わずか一か所だけの相違であっても、異なるところが存在する以上、房山石経≡契丹蔵の帙号が『随函録』によったものとはいえない。われわれは次に、両者のうちどちらがより『開元録』に合するかを検討しなければならぬ」として訂正すべき点を呈示している(同著 三一八―三二一)。
- 14 妻木直良「契丹に於ける大藏経雕造の事実を論ず」(『東洋学報』二 一九一二)を参照したい。小川貫弑『大藏経 ―成立と変遷』(百華

- 苑 一九六四)、そして小川の指摘を簡潔に整理している、竺沙雅章「契丹大藏経小考」(内田吟風博士頌寿記念会編「内田吟風博士頌寿記念東洋史論集」同朋舎 一九七八)の論考は大変参考になる。
- 15 「陽台山清水院創造藏経記」(金石萃篇) 掃葉山房 一九二六 一五三) これには道宗の咸雍四年(一〇六八)に「契丹大藏経」は「五百七十九帙」あったとされる。
- 16 竺沙雅章「開宝藏」と「契丹藏」(古典研究会編「国書漢籍論集」汲古書院 一九九一)
- 17 塚本善隆「遼代の石経統刻事業」(同著「塚本善隆著作集」五 大 東出版 一九七五 五一―一五三)
- 18 塚本善隆「遼代の石経統刻事業」(同著「塚本善隆著作集」五 大 東出版 一九七五 五〇四)に詳しい。参照されたい。
- 19 「新集藏経音義随函録」高麗大藏経三四 一〇五三下―一〇五五中
- 20 「新集藏経音義随函録」高麗大藏経三四 一〇五五中―一〇五八下
- 21 「遼文存」六(出版地不明 東京大学東洋文化研究所蔵本 No.二 九三三 九丁右―左)尚、作者については本書の末尾、「遼文存」六卷「金石」三五丁左には以下のように記載されている(東大本が管見の限り最も古いものと考えて参照している)。
- 上人墳塔記(八面刻 沙門惟和正書 天慶十年歲次庚子九月二十三日乙寺 在房山小龍村)
- 22 塚本善隆「遼代の石経統刻事業」(同著「塚本善隆著作集」五 大 東出版 一九七五 五一―一五三)
- 23 「遼史」二二(「四部備要」三三三 中華書局輯刊 一九三六 八五)
- 24 これまで当文献の取り扱いについては、「契丹大藏経」の有無と時期を検証する資料とされてきた。「釈論」の成立については管見の限り活用されていないようである。
- 25 「陽台山清水院創造藏経記」(金石萃篇) 掃葉山房 一九二六 一五三)
- 26 塚本善隆「遼代の石経統刻事業」(同著「塚本善隆著作集」五 大 東出版 一九七五 五三六)
- 27 「釈摩訶衍論記」(統藏経七二 七三―一七三四上)
- 28 「釈摩訶衍論疏」(統藏経七二 七三五上―八二七下 またこの論書は本朝の石山寺本を対校本としている)。
- 29 「釈摩訶衍論贊玄疏」(統藏経七二「贊玄疏」と「大科」は義天録に基づく。以降の志福「釈摩訶衍論通贊疏」と「通贊科」と「大科」、そして守臻「釈摩訶衍論通贊疏」と「通贊科」と「大科」も同様(新編諸宗教藏総録」大正蔵五五 一一七五中)。
- 30 「釈摩訶衍論通玄鈔」(統藏経七三 一三五上―二六九上)
- 31 「釈摩訶衍論記」(統藏経七三 一七一―一六〇上)
- 32 「釈摩訶衍論科卷下」(統藏経九五 六六三上―六八八上)
- 33 竺沙雅章「開宝藏」と「契丹藏」(古典研究会編「国書漢籍論集」汲古書院 一九九一)を参照されたい。
- 34 妻木直良「契丹に於ける大藏経彫造の事実を論ず」(「東洋学報」二 一九六七 三三四―三二八)、塚本善隆「遼代の石経統刻事業」(同著「塚本善隆著作集」五 大 東出版 一九七五 五一―一五三)、鎌田茂雄「遼代密教の澄観の華嚴」(同著「中国華嚴思想史の研究」一九六五 六〇五―六一八)、横内裕人「高麗統藏経と中世日本―院政期の東アジア世界観―」(「仏教史学研究」四五 二〇〇二 六一―七)等である。
- 35 「釈摩訶衍論贊玄疏」(統藏経七二 八四八中)
- 36 「釈摩訶衍論贊玄疏」(統藏経七二 八二九上)
- 37 「遼史」二四(「四部備要」三三三 中華書局輯刊 一九三六 九三)
- 38 「統資治通鑑」七四(「四部備要」四一 中華書局輯刊 一九三六 七六三)
- 39 「仏書解説大辞典」五(大東出版社 一九九四 二七―二八)、中村正文(本然)「釈摩訶衍論の成立に関する諸資料」(平川彰編「仏教研究の諸問題」山喜房仏書林 一九八七 一〇―一〇四)ここでは「仏書解説大辞典」の説を紹介する森田竜徳の解説がある。すなわち

『釈摩訶衍論贊玄疏』の項には以下のように解説されている。「大遼の末に属する延禧帝の大臣耶律大石が西域地方を征服し、土耳其斯坦の起兒漫にいたり、即位して自から天佑皇帝と称し、国を西遼と号した」とある。恐らく中村はこの説を参照したのであろう。つまり、先行研究では、道宗を別人として取り扱っている。天佑皇帝を西遼の天祐皇帝（遼が滅亡した際、契丹人を連れて西において建国した王朝である）とする耶律大石と理解しているものであり、分かりづらく混同してしまっただろうが、年代・記述でも相違している。

- 40 『釈摩訶衍論贊玄疏』 卍統藏経七二 八二九中
 41 『釈摩訶衍論通玄鈔』 卍統藏経七三 一六一上
 42 『釈摩訶衍論通玄鈔』 卍統藏経七三 一六一上
 43 『遼史』 二二（四部備要）三三 中華局輯刊 一九三六 八八
 44 竺沙雅章『開宝蔵』と『契丹蔵』（古典研究会編『国書漢籍論集』汲古書院 一九九一 六一九―六二二）、同著「遼代華嚴宗の一考察―主に、新出華嚴宗典籍の文献学的研究―」（『大谷大学研究年報』四九 一九九七）に詳しい。参照されたい。また『文物』に転写されている当該文献であるがあまり鮮明ではない。ここでは竺沙の資料を転載させていただいた。また本文にある写真は『文物』に掲載されているものを転写したものである（文物出版社 一九八二 六）。
- 45 『大日経義釈』 卍統藏経三六 五七〇上―一九八六下
 46 『大日経義釈演密鈔』 卍統藏経三七 二二―三上「今我天佑皇帝睿文冠古英武超今十善治民五常訓物博綜儒經有詩賦碑記之製錦繡華明允彰乎教化尤精釋典有讚序疏章之作山輝川媚聿在乎修行于茲邃旨夙促宸懷爰命瓊才俾宣秘呪因成雍初提總中京大夫慶寺屬以時緣再興未肆迺有副留守守衛尉卿隴西牛鉉守司空悟玄通圓大師弼公泊僧首紫褐師德百有餘人同致書曰伏聞毗盧大教旨趣宏深疏（中略）大康三年忽降綸旨令進神變經疏鈔科則密教司南時至矣於是敬酬聖澤兼副輿情強摭群詮謬成斯解目之曰演密鈔會於前冬詔赴行在面奉進呈勅令雕印墜典斯興仁王之力也覺苑虧虧宿種見匪生知徒然熾火之明曷益曦輪之照庶俾來者共踐玄涯爾。」
- 47 『大日経義釈演密鈔』 卍統藏経三七 九上
 48 『大日経義釈演密鈔』 卍統藏経三七 一四上
 49 塚本善隆「遼代の石経統刻事業」（同著『塚本善隆著作集』五 大東出版 一九七五 五〇八）
 50 『大日経義釈演密鈔』 卍統藏経三七 二下
 51 『顯密円通成仏心要集』 大正蔵四六 九九三下
 52 一例を示すと『顯密円通成仏心要集』の「神變鈔云。千流萬派起自崑崙積石之山。十二分經出乎總持秘密之藏・・・」（大正蔵四六一〇〇一下）『大日経義釈演密鈔』三七 一八上―下「千流萬派起自崑崙積石之山十二分經出乎總持秘密之藏・・・」と合致している。詳しくは、多田孝正「顯密円通成仏心要集の六字大明をめぐって」（『印仏研』三六一―二 一九八八）、遠藤純一郎「顯密円通成仏心要集」に於ける顯密観」（『蓮華寺仏教研究所紀要』一 二〇〇八）に詳しい。参照されたい。
- 53 多田孝正「顯密円通成仏心要集の六字大明をめぐって」（『印仏研』三六一―二 一七二）「賜紫加官の優遇を受けた人物とは見えないが、仏教を尊愛する皇帝の巡幸を受ける程の大寺に住んでいたのであるから、当時全くの無名の学僧ではなかったろうし、大同出身の漢人であるから、遼代における仏教の社会的状況もよく把握していたにちがいない」と論じている。筆者も多田説を支持する。
- 54 『顯密円通成仏心要集』 大正蔵四六 一〇〇四上―中「一切陀羅尼皆被不思議圓根。故佛頂頌云。神通勝化不思議。陀羅尼門最第一。今有未曾鑽印密教者。多云陀羅尼藏唯被下根。斯言甚謬。且諸經中說陀羅尼。或名最上乘或名無上乘。或名金剛乘或名不思議乘。豈可唯被下根耶。故清涼云。以淺為深有符理之得。以深為淺有謗法之愆。冀諸學者。切宜留心。不得固執先聞而生輕忽。五天中夏。顯密雙明方是通人。」
- 55 『顯密円通成仏心要集』 大正蔵四六 一〇〇三中―下

- 56 『釈摩訶衍論』大正蔵三一 六〇二下「不動本原甚深玄理二種論中唯釋一法。所餘法門略不別釋。云何為一法所謂不二摩訶衍法。廣説略説各差別故。」
- 57 『弁頭密二教論』弘大全一 四八〇「喩曰。不二摩訶衍及圓圓海徳諸佛者即是自性法身。是名秘密藏。亦名金剛頂大教主。等覺十地等不能見聞故得秘密號。具如金剛頂經説。」
- 58 『顯密円通成仏心要集』大正蔵四六 一〇〇三中
- 59 『円覚経大疏釈義鈔』卍統蔵経一四 八九六上
- 60 『円覚経略疏之鈔』卍統蔵経五一 三八七中
- 61 『華嚴経行願品疏』卍統蔵経七 八五三上『釈論』の六馬鳴説示を引いている（『釈摩訶衍論』大正蔵三一 五九四中）。
- 62 本稿では『釈論』の成立問題を主題としているので、真言密教における『釈論』の受容傾向には言及しなかつた。しかし空海と恵果、そして般若三藏と通理大師との関連については米田弘仁の指摘がある。「晩年の空海が重視したとも言われる『心地観経』は、父母・衆生・国王・三宝の四恩が説かれていることで有名であるが、その恩という思想を強調した論述のみられるのがほかでもない『釈論』である。しかも『釈論』ではただ単に恩の思想を説くだけではなく、根本無明に対する報恩を説く（巻四・上半三日下〔大正三三・六二四頁中〕）といった、常途のものよりもさらに一步踏み込んだ思想が展開されている。（中略）ここで般若の訳経と『釈論』との類縁性を暗示する興味深い資料のあることを紹介しておきたい。それは遼の道宗皇帝および通理大師によって行われた房山雲居寺の石経事業について、記した志才の『雲居寺統秘藏石経塔記』（『金石萃編』巻百五十三所収）である。（中略）通理大師が他の経論に見向きもせずに『釈論』と般若の訳経とのみを特別に選んで鐫刻したという事実は、彼が、この両者に何らかの類縁性を認めていたことを案じするものであり、資料的にも大いに注目されるべきものである。（中略）少なくとも『釈論』と般若の訳経との両者に関係性ありとするのが筆者の独善ではないこ
- とをこの資料より知ることができるであろう」と論じている。（米田弘仁「空海の『釈摩訶衍論』伝承——『釈摩訶衍論』重視の理由——」〔密教学研究〕三五 二〇〇三 六五—六六）
- 63 『円覚経大疏釈義鈔』卍統蔵経一四 八九六上「名為釋論。准龍樹菩薩摩訶衍論中説。馬鳴菩薩。約一百本了義大乘經。造此起信論。即知此論通釋百本經中義也。此經亦是其數。但彼論立名小殊。若不憑菩薩開示之文。如何疑情決了。故須以論為釋義之定量也。前後有廣用諸論處。其意皆然。疏但論約等者。論意已知。經約悟淨勝劣者。初淨解超過勞慮。」とある。
- 64 『円覚経略疏鈔』卍統蔵経五一 三八七中「名為釋論準龍樹菩薩摩訶衍論中説馬鳴菩薩約一百本了義大乘經造此起信論即知此論通釋百本經中義也此經亦是其數但彼論立名小殊若不憑菩薩開示之文如何疑情決了故須以論為釋義之定量也前後有廣用諸論處其意皆然又論但約覺染麤細經約悟淨勝劣今用論者分齊一也又因互顯兩義俱通。」とある。
- 65 『華嚴経行願品疏』卍統蔵経七 八五三上「馬鳴菩薩是佛滅度六百年後出世故摩訶摩耶經云如來滅度六百歲已諸外道等邪見競興毀滅佛法有一比丘名曰馬鳴善説法要降伏一切諸外道輩即宗百本大乘經乃造起信論等也」とある。
- 66 『弁頭密二教論』弘大全一 四八〇「喩曰。不二摩訶衍及圓圓海徳諸佛者即是自性法身。是名秘密藏。亦名金剛頂大教主。等覺十地等不能見聞故得秘密號。具如金剛頂經説。」
- 67 小峰彌彦編著『空海読み解き事典』（本郷書房 二〇一四 三六八—三七二）尚、空海の『弁頭密二教論』が唐代に活躍した海雲（八三四—）が、唐代の金胎両部の付法次第記として太和八年（八三四）に著した『両部大法相承師資付法記』に引用されている。すなわち「修瑜伽者發菩提心。住阿字觀觀法不生即是住毘盧遮那胎藏。如顯教大乘仁王般若云。伏忍聖胎三十人十行十迴向此名地前三十心。名住聖胎也。此約顯教漸悟菩薩地前修行。經一大阿僧祇劫。始名住聖胎菩薩。由名外凡夫修真言行菩薩則不如是。於一念頃具足五智身。住大

毘盧遮那佛位。廊周法界為曼荼羅體纒住心名入聖胎。觀至究竟名成佛位。是名超越三僧祇劫而證菩提。上來具明胎藏教意。謹依顯密二教界略敘其由。(大正藏五一 七八七上)とあるように、海雲は空海が密教の論書として『釈論』を取り扱っている姿勢を知っていたのではないかと予想される。

- 68 横内裕人「高麗大藏経と中世日本——院政期の東アジア世界観——」『仏教史学研究』四五 二〇〇二)の『高麗大藏経』と続藏経に関する図示を参照した。この他にも、野沢佳美『シリーズ・アタラクシア印刷漢文大藏経の歴史——中国・高麗篇——』三(立正大学情報メディアセンター 二〇一五)も参考としている。
- 69 野沢佳美『シリーズ・アタラクシア 印刷漢文大藏経の歴史——中国・高麗篇——』三(立正大学情報メディアセンター 二〇一五) 八六
- 70 野沢佳美『シリーズ・アタラクシア 印刷漢文大藏経の歴史——中国・高麗篇——』三(立正大学情報メディアセンター 二〇一五) 八九
- 71 房山石経の釈論の拓本は中村本然氏所蔵のもの閲覧し、刊本については国立国会図書館近代デジタルコレクションを参照した。
<http://dl.ndl.go.jp/infordip/pid/2575094?ocOpen=1>
- 72 『釈摩訶衍論』高麗大藏経三七 九八九
- 73 『釈摩訶衍論』高麗大藏経三七 卷一は一〇〇一上・卷二は一〇〇一四上・卷三は一〇二四下・卷四は一〇三五上・卷五は一〇四三下・卷六は一〇五一中・卷七は一〇五八下・卷八は一〇六四下・卷九は一〇七二下・卷十は一〇七八上
- 74 野沢佳美『シリーズ・アタラクシア 印刷漢文大藏経の歴史——中国・高麗篇——』三(立正大学情報メディアセンター 二〇一五) 八六—八七)
- 75 石井公成『『釈摩訶衍論』の成立事情』(鎌田茂雄博士還暦記念論集刊行会編『中国の仏教と文化』一九八八 三六二)
- 76 伊吹敦「元暁の著作の成立時期について」(『東洋学論叢』三一 二〇〇六)これは元暁の著作成立時期について考察を加えている。参照

されたい。

- 77 福士慈稔『新羅元暁研究』(大東出版社 二〇〇四 一八五—二九九)に詳しい。参照されたい。
- 78 牧田諦亮『牧田諦亮著作集(疑経研究)』一(臨川書店 二〇一四 二〇)
- 79 『出三藏記集』大正藏五五 三九中
- 80 船山徹『仏典はどう漢訳されたのか』(岩波書店 二〇一五 一三四—一三五)
- 81 牧田諦亮『牧田諦亮著作集(疑経研究)』一(臨川書店 二〇一四 五〇—一〇〇)詳しい。参照されたい。また、船山徹『仏典はどう漢訳されたのか』(岩波書店 二〇一五 一三〇—一三三)にも詳しい。
- 82 鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』(東京大学出版会 一九六五 六〇四—六一八)
- 83 木村清孝『中国仏教思想史(パーブル叢書)』(世界聖典刊行協会 一九九一 二〇四—二〇六)
- 84 中村本然『『釈摩訶衍論』所説の魔・外道・鬼・神について——「広釈魔事対治門」を中心として——』(『智山学報』六七 二〇一八)に詳しい。参照されたい。

キーワード

釈摩訶衍論・中国成立・房山石経・遼代